



営農情報

「あまおう」3月の管理

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

1 生育状況

2番果房は、1月の曇天の影響で着色が遅れ、出荷量が伸び悩んでいましたが、2月に入り、温度が上がったことで出荷量が急増しました。2月中旬が2番果房のピークとなり、現在は終盤となっています。(図1)。

3番果房は、早期作型、普通作型ともに過去2か年と比較して早い出蕾となっており、一部のほ場では出荷が始まっていますが(図2)、玉伸びが悪く小玉傾向です。

病害虫については、ハダニ類やアブラムシ類の発生が増加しています。

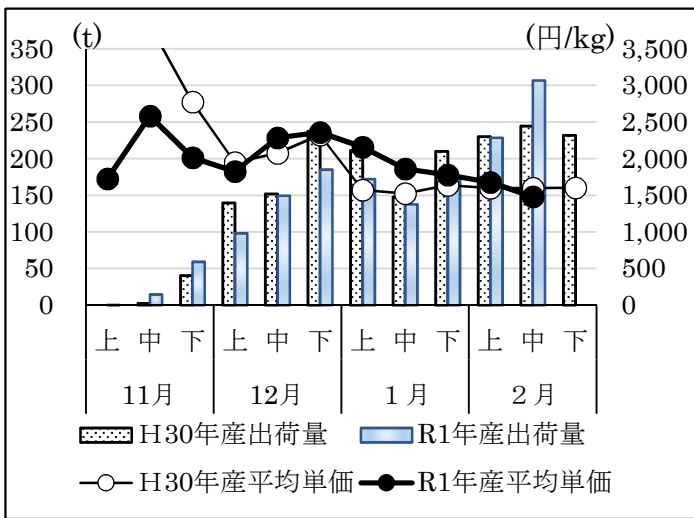


図1 南筑後普及センター管内のイチゴ総出荷量と平均単価の推移

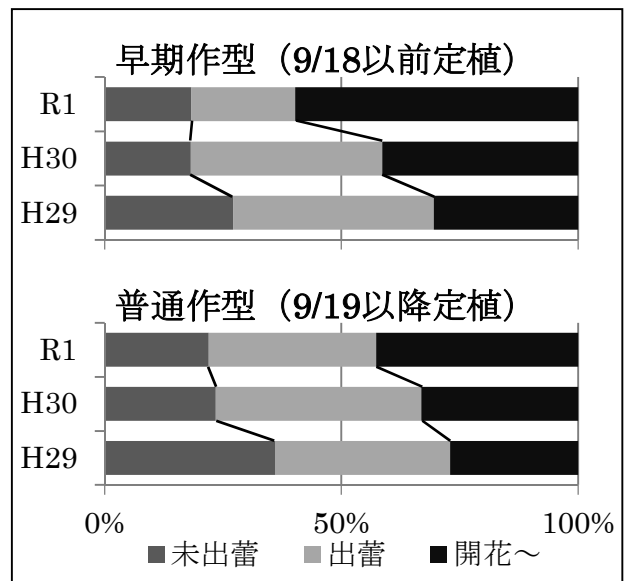


図2 3番果房出蕾状況 (調査期間: 1/30~2/7 南筑後普及指導センター管内)

2 気象予報と今後の見通し

(1) 気象予報

福岡管区気象台が発表した1か月予報は下図のようになっています。

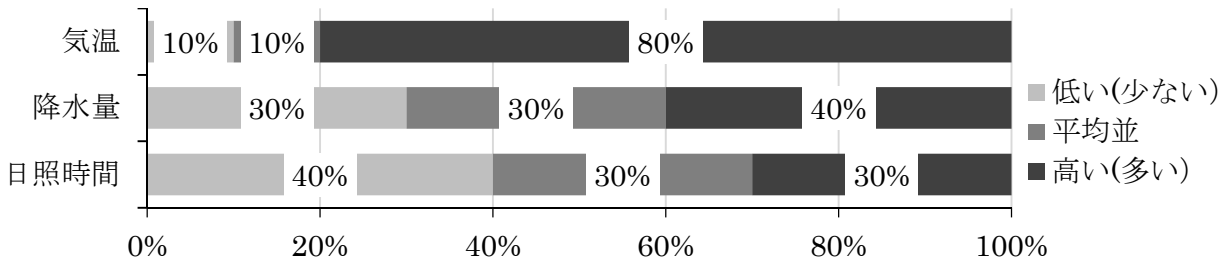


図3 1か月予報 (九州北部地方 予報期間: 2月29日~3月28日 発表日2月27日)

(2) 今後の見通し

気温は平年より高い確率が80%となっています。日照時間、降水量はほぼ平年並みの予報です。ハウスの換気に気をつけ、病害虫の早期発見、早期防除を心がけましょう。

3 今後の管理

<ポイント>

心葉は立ち上がっていますか？2番果房の着果負担のかかっている株も見受けられます。温度、電照管理、換気等で調整しますが、3番果房が連続して出蕾しており、養分競合や果実肥大不足が懸念されます。今後、出荷量が増えてくることが予想されますので、草勢（株の状態）をみながら早めの管理を行いましょう。また、気温が平年より高く、親株の生育も急いでいます。炭そ病防除と親株の手入れを早めに行いましょう。

(1) 温度管理

- 日中は、サイド・谷・妻面を開放して換気を行い、低めの温度管理を行う。
- 夜温7℃以上の日は、夜間もハウスを開放したままにする（雨天日を除く）。

表1 3月以降の温度管理の目安

午前	午後	夜間
18℃～20℃	18℃以下	5℃（夜温7℃以上は開放）

(2) 電照管理

- 草勢を見ながら徐々に電照時間を短くし、3月中下旬を目安に心葉の展開が外葉より高くなりかけたら終了する。
- 着果負担のかかっている株で心葉の伸びが悪い場合は、電照時間はそのまま様子を見、心葉が伸びてきたら短くしていく。
- 電照終了後、心葉の伸びが悪くなった場合や、展葉速度が極端に遅くなった場合は電照を再開する（2時間程度）。

(3) かん水

- 少量で回数を多く行う（1回当たりのかん水量が多いと、収穫時の果実傷みの原因となるため）。
- かん水の目安は、pF値1.7～1.8とする（朝、葉つゆをうたないようであれば土壌が乾燥している）。
- 果実品質維持のため、収穫直後に行う。
- 水分不足は、果実肥大不足や乾燥によるハダニ類の多発要因となりやすいので注意する。

(4) 施肥

- 液肥は、窒素成分で1か月当たり1～2kg/10a程度を2～3回に分けて施用する。
- 3月末を目安に施用を終了する。

(5) 株整理と玉出し

- 収穫が終了した果梗は、傷果防止と次果房の出蕾促進のため速やかに除去する。
- 枯葉や黄化した葉のみを除去し、一気に葉を除去しない。
- 随時、果実品質向上のため玉出しを行う。

(6) 摘果

- 3番果房の摘果は、果梗の形に応じて行う。また、勢が弱い場合（心葉の葉柄長9cm以下）は着果数減らす。

【1枝当たりの着果数目安】

通常果梗：3果/枝
かんざし果梗：4～6果/枝

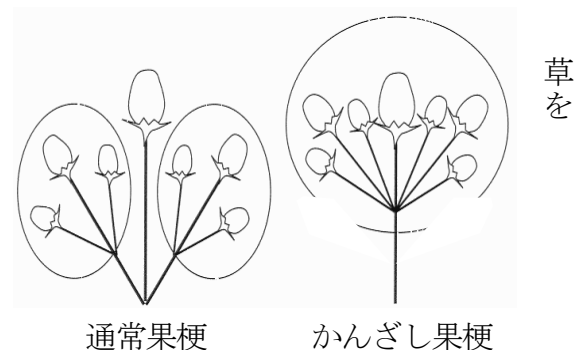


図4 果梗の形に応じた摘果

(裏面につづく)

(7) 炭酸ガス施用

- ・換気が頻繁にされるようになると、炭酸ガス施用の効果が小さくなる。
- ・日中ハウスを開放する時期（3月中下旬）を目安に施用を終了する。

(8) 病害虫防除

① ハダニ類

- ・下葉の除去後、葉裏や葉縁に十分薬液がかかるように丁寧に散布する。
- ・ハダニの多発した株は、強めに葉かぎした後に続けて2回以上防除をする。もしくは株ごと除去してハウス外に持ち出す。
- ・葉かぎしたあとの残渣は、ハウス内に放置しない。
- ・カブリダニ等天敵を利用している場合は、天敵に影響のないダニ剤を使用する。

② アザミウマ類（スリップス）

- ・発生が少ないうちは、IGR剤（マツチ乳剤、カウンター乳剤等）で防除し、多発した場合には、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC等を用いて防除する。但し、天敵やミツバチへの影響が大きい薬剤もあるため注意する。
- ・ハウスの換気時間が長くなると、ハウス周辺の雑草からハウス内に侵入するため、ハウス周辺の除草を行う。なお、除草剤散布に当たっては、サイドや妻面からの侵入に注意する。

③ うどんこ病

- ・夜温が上昇し、生育が軟弱徒長気味になると発生が多くなる。
- ・電気加熱式くん煙器や、定期的な薬剤散布による予防に努める。

④ 灰色かび病・菌核病

- ・多湿条件で発生が増加するため、曇雨天の前などは予防的な薬剤散布を行う。
- ・発病後は、早急に被害果実を取り除き薬剤による防除を行う。

⑤ アブラムシ類

- ・暖冬傾向で推移したことにより、アブラムシ類の年内の発生が長引き、年明け以降も発生が継続・増加しているほ場が見受けられる。
- ・年内に多発した場合は、発生が落ち着いた後も残存している可能性があるため、今後の気温上昇で急増しないよう、予防的な防除を行う。

<防除のポイント>

- ・ハウス内や周辺の雑草は増殖の場となるため、除草を徹底する。
- ・新葉、花蕾などに寄生することが多いので、寄生部位に薬液が十分付着するよう、薬剤散布を行う。
- ・軟弱徒長すると発生しやすいため、窒素過多にならないよう注意する。

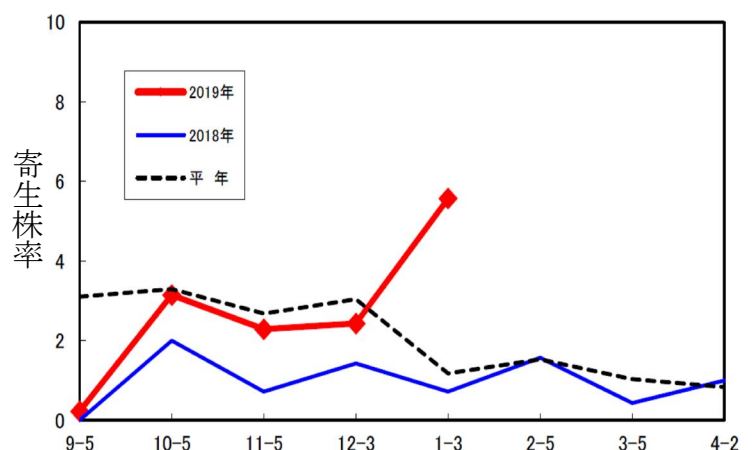


図5 アブラムシ類の発生推移
(福岡県病害虫防除所 発生予察より)

特集：次年度に向け、計画的な親株の管理をしましょう

今年は平年よりも気温が高く、親株の生育は順調に推移しています。昨年は4月から5月にかけて平年と比べ降雨が少なく、かん水不足や肥料切れによるランナーの発生が遅れるほ場が見られました。

親株からの切り離しが遅れると炭そ病に感染する危険性が非常に高くなります。充実した苗を作るためにも、計画的に早めの作業を行い、採苗時期が遅れないようにしましょう。

<親株管理のポイント>

① 株整理

- ・ 2月下旬～3月上旬に下葉や果房を除去し、炭そ病の薬剤防除を実施する。

② 稲ワラ敷き

- ・ ランナー発生前に、畝面に切りワラを敷きつめ、かん水施設を設置する。

③ 病虫害防除

<炭そ病>

- ・ 7～10日に1回を目安として、薬剤散布を行う。
- ・ 降雨などで感染拡大するため、降雨前後の防除を徹底する。
- ・ 発生株を確認したときは、発生株及び周辺の株をほ場の外へ持ち出し処分する。

<萎黄病>

- ・ 発病株及びその株から発生したランナーは除去、処分する。(ランナー伝染する)

<ハダニ類>

ハダニ類は外からの飛び込みはほとんどないため、親株床・育苗床・本ぼのいずれかのステージでハダニ類の発生を断ち切る。

④ かん水・施肥

- ・ ランナー発生期の4～5月に乾燥すると、採苗時期の遅れや採苗本数不足の原因となるため、かん水を行う。
- ・ プランターやポットは乾燥しやすいため、こまめにかん水を行う。
- ・ プランターやポットの場合は、4月上旬までにIB化成S1号を1株当たり10粒程度、5月上旬までに1株あたり5～10粒の追肥を行う。エコロングの場合は、1株当たり10g程度の追肥を行う。

⑤ その他

- ・ 土耕ほ場では排水対策用の溝を必ず整備する。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう！